

チャネルキャットフィッシュ幼魚の捕獲に向けたカゴ漁具の検討

三枝 仁

1. 目的

琵琶湖においてチャネルキャットフィッシュが産卵繁殖する可能性が高まってきている。本種の拡散を防止するためには、発生した稚魚や幼魚を効率よく捕獲する方法が必要である。

そこで、これらを捕獲する方法として、琵琶湖における既存のカゴ漁具で捕獲できるかを試した。

2. 方法

水産試験場の試験池で満1歳の幼魚がカゴ漁具で捕獲できるかを検証した。使用したカゴ漁具は、エビタツベ（縦型）、トリカルネット製エビタツベ（横型）、竹製エビタツベ（横型）、塩ビパイプ（片方のみを4mmメッシュのネットでふさいだもの）を用いた（写真1）。試験は、幼魚23尾（平均体長79.87mm）を収容した8㎡の試験池に、8月14日に各種カゴ1個ずつを同時に設置して、翌日から4日後までの毎朝、幼魚が入っているかを観察した。

3. 結果

試験の結果、3日後まではいずれのカゴでも幼魚の捕獲は確認できなかったが、4日目にトリカルネット製エビタツベで同時に2尾

が捕獲でき、既存のカゴ漁法で本種幼魚を駆除できる可能性が見いだせた（写真2）。

本種の幼魚はふ化後1週間程度で群泳し、コンクリートブロックの穴に密集して潜むなどの生態が判っている。今回供試した幼魚についても、試験池における馴致期間中には群泳する様子が観察でき、カゴ漁具で大量に捕獲できることを期待したが、実際に捕獲できたのは2尾（8.7%）に留まった。これは、供試した幼魚が体サイズの比較的大きい満1歳であったためにカゴ漁具の入り口径との関係から入り難かった可能性や、本種が狭い空間を住处とする習性を持つためにカゴ漁具の入り口を自由に出入りした可能性などが考えられた。今後は、当歳魚などより小型の稚魚の捕獲を試みるとともに、カゴの入り口形状と魚体サイズの関係などを詳しく検証する必要がある。



写真1 試験に用いたカゴ漁具
(左からエビタツベ、トリカルネット製エビタツベ、竹製エビタツベ、塩ビパイプ)

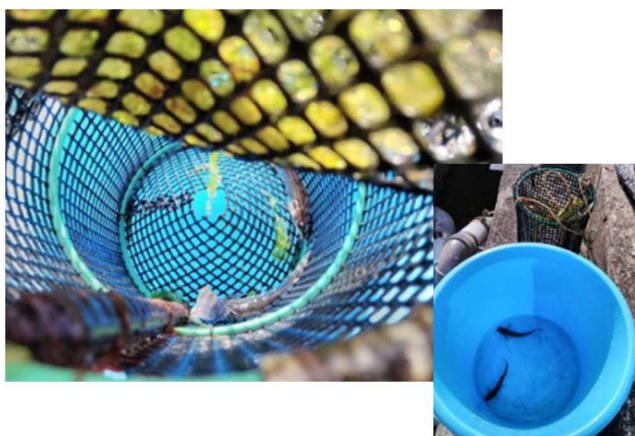


写真2 トリカルネット製タツベで捕獲した幼魚